

# 和楽器ユニットおとぎ 20周年記念コンサート

2024年(令和6年)7月21日  
於:ドーンセンター

おとぎ公式サイトのアドレスが変わりました。  
新サイト: <https://otogi-wagakki.com>  
※旧アドレスからも自動で新サイトに繋がります。



## 【第一部】

### 一. 「四人の律動」(改作初演) 作曲:木場大輔

2016年初演のオリジナル曲を、本日の20周年記念公演のために大幅改作しました。

無機質で機械的なビートを刻み、その反復の中でハーモニーやポリリズムの掛合いなどが次第に展開し、四つの異なる音色の和楽器の個性が浮き彫りになる。

ミニマルミュージックやロックの影響を受けた作品といえる。(木場大輔)

### 二. 「大漁網起し木遣」 富山県民謡(氷見市) / 編曲:木場大輔

漁業の町、氷見伝統の定置網漁の作業唄より。

機械化が進む以前は、あらゆる仕事の場において仕事唄が重要な役割を果たしてきたことでしょう。

おとぎ結成時から演奏し続けてきた、代表的なレパートリーの一つです。

去る元日に発生した能登半島地震では、氷見の漁港も被害が大きかったと聞いています。

本日は、被災地の復興を祈念し、被災された方々に思いを寄せつつ演奏したいと思います。

### 三. 「風の夢」~越中おわら幻想~ 富山県民謡 / 編曲:木場大輔

胡弓が使われる最も有名な祭り、越中八尾「おわら風の盆」。

その風の盆で演奏される「越中おわら節」をモチーフにした、幻想的な趣きのアレンジ曲です。

(CD『音戯紀行』に収録)

### 四. 「天満の子守唄」 大阪府民謡 / 木場大輔 編曲

「ねんねころいち天満の市で」の歌い出しで知られる、大阪を代表する子守唄です。

2014年、NHK木曜時代劇『銀二貫』の挿入歌としても使われました。

此処、ドーンセンターからほど近い南天満公園内に歌碑があります。(CD『音戯紀行』に収録)

### 五. 「シルクロード組曲 第一番」~月と大地の記憶~ 木場大輔 作曲

I 都大路 II 草原を駆ける III 駱駝と月 IV 高原の旋舞 V オアシスの輝き VI 新たな旅へ

和楽器のルーツとしても縁深いシルクロード。民族や文化の十字路の様々なイメージを盛り込んだ組曲で、本作も結成初期からの代表的レパートリーです。

さあ皆さま、おとぎと共に音楽旅行に出かけましょう！(CD『音戯紀行』に収録)

## 【第二部】

### 六.「組曲 古事記 第一番」～天地創生篇～ 作曲:木場大輔 / 琵琶歌作詞・節付:川村旭芳

#### I 天地開闢

十七絃の独奏で、万物がまだ混沌とした天地の始まりを奏で、次いで尺八・胡弓・琵琶・十七絃によるファンファーレが神々の登場を告げる。そして古事記の壮大な物語の始まりを、全体でのアンサンブルにより印象的に歌い上げる。

そもそも宇宙の元は混沌として誰かその形を知らむしかるに天地初めて分かれし時高天原に一柱の神  
成り給ひぬこれより七代後の天つ神伊邪那岐伊邪那美二柱の神こそ万物の御祖と為り給ひぬ

#### II 国生み

伊邪那岐神・伊邪那美神の二柱の神により日本列島の島々が生み出されていく情景を、雄大な旋律で表現している。はじめ琵琶により奏でられる主題を胡弓が引き継ぎ、十七絃の短いソロを挟み、主題は尺八を経て再び胡弓へと引き渡される。

#### III 黄泉の国(1)

火の神を産んだ時の大火傷が原因で、妻の伊邪那美神を亡くした伊邪那岐神の嘆きを、尺八が表現する。国生みの主題を陰音階で引用している。次いで妻の面影を求めて黄泉の国に旅立ち、妻と対面するまでの情景を、箏と琵琶の全音音階\*を多用した掛合いで表現している。

\*全音音階:1オクターブを6つの全音で等分した音階で、ドビュッシーが好んで用いたことでも知られる。

「あな哀しやな我すでに黄泉つへぐひしつしかれども愛しき君此処におはしませば共に還りたし  
この思ひ黄泉神と語らはむと存ずされば再び出で来るまでゆめゆめ我をば見給ふな」

#### III 黄泉の国(2)

共に帰ろうと妻の返答を待つ伊邪那岐神。その間、決して妻の姿を見てはならないという。暗くジメジメした洞窟のような黄泉の国での不気味な時間を、箏と琵琶が表現する。ついに約束を破り、妻の醜くおぞましい姿を見てしまった伊邪那岐神。慌てて逃げ出し、怒りに燃える妻が恐ろしい醜女や黄泉の軍勢にその後を追わせる情景を、琵琶と箏で表現している。様々な知恵で黄泉の軍勢から逃れ、黄泉の国への入り口を岩で塞ぎ、妻との永遠の別れとなる場面を、尺八が国生みの主題を引用して悲しく奏でる。

#### IV 天照大御神と須佐之男命

須佐之男命 天照大御神のおはします高天原に参上り勝さびに悪しき態をなす

太陽の神、天照大御神と、荒ぶる嵐の神、須佐之男命。ともに伊邪那岐神から生まれた姉弟の神でありながら、対照的な性格をもつ二柱の神を、胡弓・箏＝天照大御神 尺八・琵琶＝須佐之男命のアンサンブルで表現。高天原での弟の横暴をはじめはかばっていた天照大御神が、ついには我慢ならず、天の石屋戸に籠ってしまい、世界が暗闇に包まれてしまうまでを描いている。

#### V 天の石屋戸

天宇受売命 日影蔓をたすきに掛けて真折葛を髪に結び天の香山の小竹葉を持ちて神がかりして踊り狂ふ

暗闇に包まれてしまった世界。神々はかがり火のもと楽しそうな宴を繰り広げ、天宇受売命の踊りで興に乗り大騒ぎ。不思議に思った天照大御神が石屋戸から姿を見せ、世界が再びまばゆい光で満たされるまでを、笛を中心に神楽のお囃子風の旋律と5拍子～3拍子～2拍子の変拍子のリズムで表現している。

#### VI 八俣遠呂智

八つ尾八つ頭の八俣遠呂智 その目はホオズキの如く血走りて背には杉や檜が生ひ茂り  
八つの谷八つの峰を這ひ渡れば腹は赤き血にじみて爛れたり

八俣遠呂智が毎年現れて娘を食べてしまうと翁が悲しむ様子を、琵琶と十七絃のアンサンブルで表現している。続くトレモロの部分と合わせて、減七の和音を特徴的に用いている。次いで尺八独奏による英雄的旋律は、遠呂智を退治しようという須佐之男命の知恵と勇気を表現している。そして6/4拍子のリズムにのせて尺八の即興演奏が展開され、さらに胡弓との掛合いを挟んで激しさを増してゆくアンサンブルは、遠呂智が迫り来て、戦う情景を表現している。ついに遠呂智を退治した須佐之男命を讃える英雄的旋律が再び奏でられる。翁の娘を妻に迎えて、宮殿をつくる際に詠んだとされる次の和歌を歌詞とした歌で、組曲はクライマックスを迎える。

「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を」